



癒しと教育

津守 真

ひとりの男の子が、裏庭の水道でホースの水を飛ばしていた。ときどきホースを放して、落ち着きなく走り回る。私を見ると走って来て私の手を引いた。私は、いつも担任の男性職員がこの子とかかわるとき、肩に手を触れたり、背中から抱き抱えて身体を接しているのを見ていたので、同じようにこの子の肩に手を触れた。その日は私はスリッパをはいていたが、それがその子には不満のように思えたので、私はスリッパも靴下も脱いでその子に近寄り身体に触れた。その子はホースの水を飛ばしながら足元の砂を丁寧にいじりはじめて、その子の心が次第に落ち着いてくるのが私には分かった。こうしてかなり長い時間、その子が移動するときも私は子ども体の一部が触れ



ることにつとめた。

保育の後、その職員と話してわかったのだが、こうして体を接して水道をやった後に、突然、この子は机の上で、鋏を器用に使って曲線を切ったり、鉛筆でこまかな絵をかいたり、全く違う活動を始めるのだという。他人はその後者の活動を評価するが、保育者としては、その前の部分がより大切な時間と思っていると話してくれた。前の部分を丁寧で過ごせば、後の部分は自然に生まれてくるから、大人は見ているだけでもよいくらいである。

この日、私はこの子と庭の水道で付き合いながら、新約聖書の中の「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」（マルコ5章21節）の話を考えていた。ヤイロの幼い娘が死にかけていた。ヤイロに請われてイエスが一緒に出かける途中で、十二年間も出血が止まらないで医者にも全財産を使い果たした女が、イエスの服に触れた。するとすぐ出血が止まって病気が癒されたという記事である。

ここで起こったことをできるだけ元の状況にもどして読み直してみる。まずヤイロの家に行こうとする途中で、偶然に女に出会う。偶然のチャンスをだいにしなければ癒しは始まらない。女はイエスを見て、この人の中に人格的な力を感じた。そしてその服に触れた。女は癒されたことを自分の体を感じた。同時にイエスは自分の内か



ら力が出ていったことに気づいた。人々は大勢の群衆の中でだれが触ったのか分かる筈がないと言うが、これは当事者には分かる感覚ではないだろうか。癒しは一方的な作用ではなく、相互の心身の触れ合いから生じることを、この記事ははっきりと示している。

聖書の物語と保育とを同列に論じることは簡単にはできないだろうが、私は保育の中で小さな規模で癒しは日常的になされているのではないかと思う。最初に述べた子どもに戻って考えてみよう。子どもが私を見て、手を引いた。私はこの子の日頃気にかけており、私はその子に答えたいと思った。私はその子が移動するときも手を触れつづけた。そしてその子の心が落ち着いてくるのが分かった。私もその子とともにいるのが快くなる。裏庭の一隅で、私も癒され、子どもも癒されている。そのあと、その子は別の活動をはじめ、私はいなくてもよくなった。

教育と癒しとは同じ空間で同時になされる。癒す (heal) という語は、もともと自動詞であるという。healはwoundと語源を同じくする。癒されるのは人間が全体性を回復することである。それは人と人との相互性の中でなされる。

保育には癒しと教育と両方の機能がある。子どもは幼稚園や学校の中で傷つき、またその中で癒される。癒しのはたらきが失われたら家庭も、幼稚園も、学校も崩壊する。現代の学校の崩壊はここに深因があるのではないだろうか。